

動きだすまでの時間

高橋陽子
(幼稚園教諭)

幼稚園で子どもと共に過ごしていると、夢中になっていく姿や、喜んだり困ったりしている表情、発せられた言葉などから、教師はうれしくなったり、考え込んだり、心や体が動きだすことがあります。そういったことは子どもと教師の間にかかるだけではなく、子ども同士の間でも大いに感じあいながら、園での生活は進んでいきます。

遊戯室に、おひな様の七段飾りが飾ってある頃のことです。園舎から出た所で、年中組の十人ほどの子どもたちが、それぞれにボウ

ルでせっけんのはりばりに専念していました。五、六人が保育室から園庭へ出る三段の階段に座っていたでしょうか。一番上にいたA子が「ちよつと、私たち、おひな様みたい」と声を上げました。そこにいた子どもたちは、その声に顔を上げ、「本当だね」という表情をしました。A子が「男、女、男、女、女って並んだら、おひな様とお内裏様になる」と言うのと、子どもたちはボウルを持って移動し、並び変わって作業を続けます。今度は「(この段に)女の子だけ、(この段に)男の子だけで並べば、三人官女と五人ばやしみたい」と言うのと、ま

たボウルを持って移動。移動してもクルクルと（この頃子どもたちは、泡立て器を片手でシヤカシヤカではなく、両手の手のひらに挟んでクルクル回すように使っていました）泡立て器を動かしながら、視線は自分の泡に向けていました。作業に集中しながらも、友達の声に耳を傾け、ひな壇のイメージを重ね、黙々と気持ち添わせているようでした。それでいて、自分の手は休めない、その場を包み込むような空気感に私は心を動かされました。四月からほぼ一年間一緒に過ごしてきた時間や一人ひとりの成長などが、このような新しい時間、空間をつくり出しているのだと思います。

この場面では、まるで体が無意識に反応したかのように、すーっと友達の思いに合わせて動いていたように感じました。しかし、子どもたちは、新しい遊びや出来事に、いつも

すーっと加わったり試してみたりするとは限りません。「入りたいな」「やってみたいな」と気持ちが動いても、そう簡単に事が進むとは限りません。また、最初は新しいことに抵抗を感じてしまうこともあります。私が励まして、周りの子どもたちが声をかけても、最終的に決めて行動に出るのはその子ども自身です。自分なりの方法で動きだす子どももいますし、友達という存在に支えられて、行動に移す子どももいます。

十二月初旬。本園ではお餅つきを行います。

年少児B夫が、朝保育室に入ってくるなり、「お餅、食べないからね」と言いました。新しく出合ったものはなかなか食べようとして、初めてのことには抵抗を示すなど、入園からのB夫の姿を思えば予測がついたのです。

翌日も園庭で何人かで踊っていると、遊戯室の中から「何やってんだあ」「またやってんのかあ」と言いながらこつちを見ていました。その時、「あれ？ 手が私たちと同じポーズになっている」と気づき、「こつちで一緒に踊ってみましょうよ」と声をかけました。外には来ましたが、またちよっかいを出してきて、ちつとも一緒に踊る感じにはなりませんでした。

降園後、「遊戯室でのC君たち、こんな感じでしたよ」と写真を見せてもらうと、窓越しに外を見ている彼らの後ろ姿は、手だけではなく、体全部、同じように動いていたのです。「やることはわかっているよ、でも、最初からやってみるなんてとんでもない！」という気持ちの表現だったのでしょうか。数日して、「仕方ない、やるか」と友達のを腕で押すようにしながら踊りの輪に入ってきたC夫の

姿がありました。友達とのつながりができていて心強かったことや、大きくなった自分を意識し自信を持ち始めたことから、動きだせたように感じました。

仲間に加わるまでの時間、遊具に触れてみるまでの時間、自分のクラス以外の場所に入ってみるまでの時間などいろいろな場面において、一人ひとり動きだすまでの時間やタイミングというものがありません。「やりたいんだ」という意志や「(人や物やことに)かかわりたい」という気持ちがあるからこそ、必要な時間です。安心して、その子らしく動きだせるまでの時間を保障し、大事にしていきたいと思えます。